

北海道の山間・漁村地域における健康と家族

——留萌市と士別市の女性たちの活動を通して——

平 賀 明 子

鈴 木 克 典

幅 崎 麻紀子

北海道の山間・漁村地域における健康と家族 —留萌市と士別市の女性たちの活動を通して—

平賀明子
鈴木克典
幅埼麻紀子

目次

- I. 問題の所在
- II. 調査地の概観
- III. 調査方法と活動体験
- IV. 分析結果
- V. 結論と今後の課題

I. 問題の所在

今日、健康は、国民にとって、関心の高い問題である。北海道の山間・漁村地域は、都市部の人々の健康を担うオアシスとして捉えられ、グリーンツーリズムやヘルスツーリズムなど、健康を担う場所として注目されている。しかし、その一方で、健康を担うそれら地域の人々の「健康観」とは何かを改めて問い直すと、必ずしも明らかにはされていない。そこには、生業、社会・文化、地域といった環境要因が都市とは異なるローカルな「健康観」に影響を与えているのではないか。

なお、ここで取り上げる「健康観」とは、人々の健康に対する意識あるいは行動など、健康にかかわる広い範囲を包括する概念と捉えたい。つまり、健康を単なる身体的な健康に限定せず、人との交流がその人に与えると思われる心理的あるいは精神的な健康といった well-being の要素にも視点を拡大する。

そこで本研究では、北海道の山間と漁村地

域において、ジェンダーがどのように「健康」にかかわるのかを、主に「女性」という視点から考察する。そして、「健康」を維持し、支えている資源について、家族や地縁など人のネットワーク等の資源の中に探る。

調査地は、漁村地域として留萌市を、山間地域として士別市を選んだ。その理由は、両市ともに過疎化、高齢化という共通性を持ち、留萌市は「笑顔で元気な健康の街づくり」を政策としてかかげ、“観光”、“食”、“人”をテーマとした地域の活性化に女性たちがかわりを持ち、一方、士別市は世界各地から羊を輸入しヒツジを核とした工房などでの女性たちによる地域交流が盛んであるからである。

いまや女性たちは、健康に関する自らの興味・関心を超え、地域に生きる当事者として重要な役割を担うことが期待されているのではないか。というのも、ローカルな地方経済は働く若者の流出で財政的な困難を抱え、地域に埋もれた資源の再発掘と手間暇を惜しまない人的な資源に頼るほかないからである。

これまで女性たちは賃金に換算されないけれど、家庭や地域で手間暇のかかる仕事を担ってきた。そうした仕事が報酬として支払われるとすればたいへんな額になるだろう。そうした女性たちの不満を掬いあげ、かれらの仕事に正当な評価と報酬を支払うNPOのような組織も徐々にではあるがみられるようになってきた。

地方も地方で、埋もれていた資源の発掘を求め、一村一品運動から地産地消の動きへと努力を重ねている士別市のような例もある。しかし、地域のげんき（活性化）と女性たちの評価と報酬のあいだにはいまだ大きな溝があるようだ。地域は活性化のために、どのくらい女性たちを活用しているのだろうか。人は認められ、評価されてげんきになる。それは「健康」になるということだ。家庭内労働をあたりまえとされ、言葉による感謝も、賃労働による社会的な承認も受けずにきた女性たちが自信をもつこともなく、精神的なうつ状態になったとしても不思議ではない。健康であり続けるには、条件整備が必要なのだ。

このことから、「地域のげんき（活性化）と女性の活用は互いに作用しあい、地域の健康・福祉（well-being）にプラスの影響を与える。」という仮説をたて、検証したい。

II. 調査地の概観

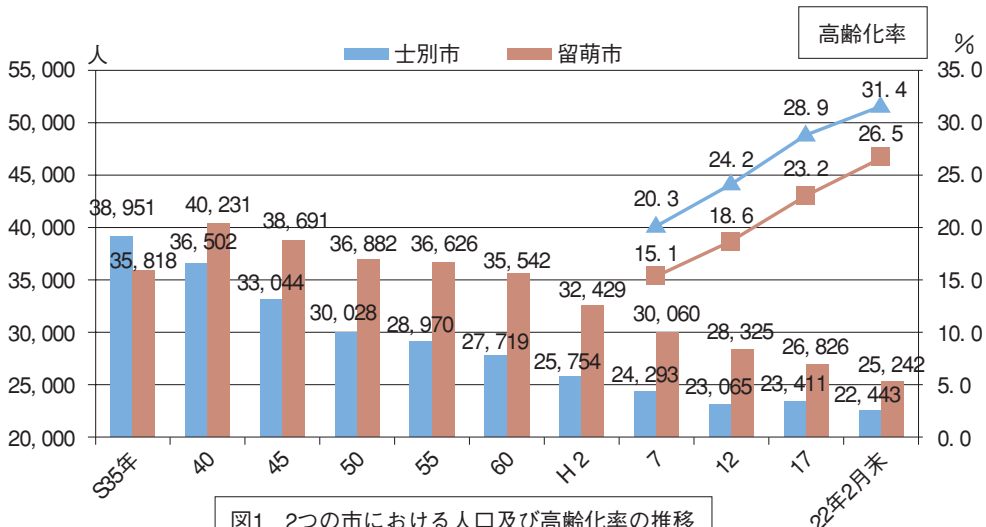
2-1 地理的位置、人口減少と高齢化率

はじめに、2つの地域が北海道のどこに位置しているか、また人口の減少傾向と高齢化

の推移を概観しておきたい。留萌市は、北海道北西に位置する日本海に面した港町であり、地域振興策に力をいれている。豊富な食と観光で市を売り込み、支庁「留萌食ロード構想」を提唱し、経済界と行政が一体となって進めている（国土交通省関係）。地産地消については、ネットワークを使い留萌の食をアピールする地元発信のホームページが多い。

一方士別市は、北海道北部の中心部に位置した農業を基幹産業としたまちで、サフォーク羊をテーマとした「サフォークランド士別」、自動車関連メーカー等が立地する「自動車等試験研究のまち」、スポーツや芸術活動の合宿のために集う「合宿の里」、幅広い人々の輪をはぐくむとともに、地域間の連携や相互交流を深める「生涯学習のまち」、恵まれた自然を保全し、将来に継承する「水とみどりの里」の5つを柱としたまちづくりを進めている。

士別市は留萌市よりも3倍の土地面積を有するが、それは1954年（昭和29年）上士別村、多寄村、温根別村と合併したこと、2005年（平成17年）に朝日町が合併して士別市が誕生したことによる。人口の減少と高齢化の推



出典：平成22年度版士別市統計書，平成22年度版留萌市統計書

移をみてみると、留萌市は1960年（昭和35年）に35,818人であった人口が2010年（平成22年）には25,242人に減り、この50年のあいだに約10,000人減少した。

一方、高齢化率は平成7年の15.1%から平成22年までの15年間に26.5%に増加した。士別市の場合も同じ年度推移でみると、38,951人から22,443人へと50年間で約16,000人ものが市から流出し、反対に高齢化率は20.3%から31.4%に増加した。士別市が抱える少子高齢化は留萌市よりもより深刻だといえるだろう（図1参照のこと）。

2-2 北海道の地域特性と女性の活用

笹森（2005, p165-243）は北海道の地域特性について、経済中心の開発は、「生産の場」としての開発が支配的であったため、「生活の場」としての開発は相対的に遅れていた、と指摘する。そこで、快適な住民生活の場を築くには、住民自身が何を欲しているかを見極め、社会環境、生活環境の場にその欲求を投影させていくことであるという。

しかしながら、これらの発想には、行政が住民サイドに立って社会環境、生活環境を整えるという上からの目線が見え隠れしてしまう。つまり、住民が主役、あるいは当事者として社会環境や生活環境を整備していく、そのために住民自らが自分たちのニーズを出し合い、行政に働きかけ、住民と行政が横に連携をとりあう、という発想ではない。

ここで一人の社会学者、鶴見和子の「内発的發展」という視点がヒントになると思われる。鶴見は南方熊楠の理論を発展させ、東洋の知恵ともいわれる「縁」がモノやコトと出会い、それが互いに啓発したり、影響し合い、創造を生み出すプロセスとなって発展していく、と述べている（川勝・鶴見、2008）。

これを地域のげんき（活性化）との関連でみてみると、地元にもともとあったモノやコトを再発見し、過去にさかのぼって知恵を学

び、今いる人々につなげていく。ここで主役は住民であり、さらに言えば、女性の仕事の再評価という視点である。なぜなら、女性たちはもともと賃金には換算されないけれど、身近にあるモノやコトを大切に、家族や地域のために働いてきた。しかしながら、その行為を家族からも地域の人々からも十分評価され、言葉や態度で感謝されてきたかというところだろうか。

女性の活用に関して、農村女性や漁村女性のリーダーシップ研究を行ってきた中道（2008, p131-156）は女性の労働は「みえない」のであり、女性は社会的にも全く登用されていない、女性たちの活動がみえるものとなり、社会参画につなげるには、女性たちの意識改革が必要である、と指摘する。

しかし、女性たちの意識改革が進むためには、行政側からの上からの目線ではなく、「女性の活用」を横の目線、つまり相互に学び合い、知恵を出し合うとことで可能になるのではないかと。つまり、それが女性たちに自信を与え、自分たちがしてきた行為は無駄ではなかったという思いにさせるのではないかと。留萌市のエフエムもえるが行っているNPO活動は、女性たちの家庭内労働で培った特性を評価し、そこで働く彼女たちに自信を与えているようだ。彼女たちによれば、地元のモノとコトの再発見は地元への強いアイデンティティとなり、それを地元に住む他の人にも伝えないではいけないという。これは、地域のげんき（活性化）に結びつく行為とはいえないだろうか。

2-3 「健康」に関する市側の取り組み

留萌市は平成20から21年までの北海道地域再生プロジェクトとしてチャレンジ交付金採択事業5,000千円を道から受け、「留萌の魅力・再発見プロジェクト」を立ち上げる。

プロジェクトの目標は、留萌の魅力を再認識、再発見しながら、留萌の食、人、資源を

通してこれまでの観光ツーリズムに新たに健康(ヘルス)という価値観を加え、市民はもとより、観光客が留萌で安心、安全、新鮮な食、留萌の農山漁村や街の人情、おもてなしを通じて、健康になるための方法論を確立しながら、将来的にヘルスツーリズムの町としての商品化を目指し、元気な留萌の再生に繋げていく、というものである。たとえば、「ヘルスツーリズム実験プログラム」の具体的事業として、①安心安全なヘルシー食材資源調査、②農山村体験交流プログラム、③健康(ヘルス)ツーリズムコンテンツ研究等、がある。

その他に、ヘルスツーリズムモニターツアーを春と秋の2回行っている(平成21年5月と10月)。平成22年3月には「未来の食と観光を考えるシンポジウム」を開催している。最初、地元の住民に映画を観せる。内容は、「学校給食と高齢者の在宅給食をオーガニックにする」試みに挑戦したフランスの小さな村のドキュメンタリー映画である。その後、地元の有機農業者、地域食材をつかって人を繋ぐ活動をする女性、大学教員(筆者)で次世代を担う子どもたちの食についてトークセッションを行い、市の取り組みを紹介した。

一方、士別市には留萌市のような「健康」をキーワードとする具体的な取り組みは行われていない。しかし、先に述べた市の5つの柱のなかには、市の重点プロジェクトとして「いきいき健康プロジェクト」が含まれている。それはどのようなものなのだろうか。

たとえば、柱の一つである「サフォークランド士別」は「羊と雲の丘」として知られ、その山の頂からは牧歌的な北欧の香りがただよう。丘の中腹にはわれわれの調査地「世界のめん羊館」がある。マップや雑誌「じゃらん」にも紹介され、最近、そこを立ち寄る若者や外国人も増えているという。また二つ目の柱である「合宿の里」は、地元で長年親しまれている温泉宿、ホテル翠月である。この

宿は三つ目の柱である「自動車等試験研究のまち」関連の人たちなど、毎年多くの合宿者を受け入れている。なぜ、この地が選ばれたかということ、冬と夏の寒暖差が70℃もあり、車のテストコースとしてぴったりだということである。他にもマラソンコースとして、かの有名な高橋尚子、野口みずき選手なども利用しているという。

調査地である「世界のめん羊館」と「合宿の里」は提携関係にあり、めん羊館で体験学習を希望すると、通常よりも安く温泉宿に泊まることができる。めん羊館では「羊」の毛を刈ることに始まり、毛を洗い、毛を染め、紡ぎ作品に仕上げるまでの工程すべてを行う。われわれが出会った女性たちは、そのプロセスが楽しくてたまらない、と言っていた。健康には直接関連しないが、市の提供する工房は、小中学校の子どもたちが体験できる場であり、また女性たちが人との交流や作品を紡ぐなかで自らの病が癒されたり、健康を維持する場となっていた。

2-4 「健康」に関する住民側の取り組み —留萌市「フードマガジン」の場合—

活動の趣旨は、地元に住む人々が地元の豊富な食を“あたりまえに”食べ、それが本当に豊かであるということを感じるということ。を旨として月に1~2回程度、30~60人程度が集まって食事会をする。これといった創作料理の料理会ではなく、普段食べている美味しい地元の食べ方を持ち回りで披露(調理)し合ったり、年末には地元の餅米で親子による餅つきや、地元の野菜で漬け物を漬けたりする。会則や入会制度等はなく、あくまで個々人の自由意志でその都度集まって開催する。

主宰者であるSさんは40歳(女性 平成22年時点)、3人の子どもの母親である。参加者は主に主婦が多いが、男性の参加者もいる。商業的、政治的、宗教的な色はない。運営手法については主宰者と彼女のパートナー(エ

フェムもえる会員)、他の数人で相談して決める。参加の呼びかけはホームページ「留萌フードマガジン」で行う。他にSさんの活動はフリーペーパー「るもい fan 通信」(月一回発行)によっても知ることができる。

一 士別市「めん羊工芸館くるるん」の場合

昭和58年に現在の「めん羊工芸館くるるん」の前身「くるるん会」が発足された。当初は市が開催する「くらしの紡ぎセミナー」を受講した女性20名で始まったとされている。まちおこし団体・士別市サフォーク研究会の会長で、工芸館代表を務める染織家であり、作品の指導者でもあるTさんによると、現在の工芸館になるまでに長い道のりと地道な活動、そして時代の潮流ともいえる“運”もあったという。昭和55年に青年会議所との連携で発足した「サフォーク研究会」(市民の会費で運営)は、減反、人口流出、家業を継げる人のみが残る状況に、切羽詰まった資源発掘を迫られていた。そこでめん羊に着目して羊毛による作品づくりを始め、昭和58年からほぼ毎年デパートに出品する。翌年、札幌と旭川のデパートの一村一品を集めたフロンティアフェスティバルで、羊による「まちおこし」として注目される。それは「市民が先発して実績をつくり官が支援するという珍しい形」だったという。

その活動は平成3年にサントリー地域文化賞受賞、平成5年に「国土庁長官賞」受賞し、その実績が買われて平成6年に世界のめん羊館がオープンする。恵まれた自然環境は羊毛による作品づくりの宝庫だ。たんばぼやくるみ、オンコの木(幹のみ利用)、豆リング、よもぎ等は柔らかく淡い色合いを出し、糸の新しい発見によるハーモニーから美しい作品が紡がれていく。

2008年には工芸館に約5000人もの人が訪れ、なかには手織りのストラップやフェルトなどを体験する人もいる。工芸館は通常2人のアルバイト女性が交代で常駐し、販売から客の

応対まで行う。その他に市の女性たちが週の何日か来館して作品づくりをしている。女性たちは羊毛をつうじて「まちづくり」に貢献するだけでなく、作品づくりをとおして健康が維持され、また作品を売ること税金を納める側にもなっている。それはまさに市のまちづくりの基本理念である①市民、②連携、③地域資源、④交流のすべてを満たした活動とはいえないだろうか。

Ⅲ. 調査方法と活動体験

3-1 調査時期と調査対象者

調査時期と調査対象者、質問内容は以下のとおりである⁽¹⁾。

調査時期

留萌市：2010年1月22日～23日

2010年1月30日

士別市：2009年12月25日～26日

2010年2月19日～20日

調査対象者⁽²⁾

留萌市：フードマガジン代表者とその活動仲間たち数人への聞き取り調査。

士別市：ヒツジの工房代表者とその活動仲間の女性たち数人への聞き取り調査。

質問内容

①活動を始めたきっかけ、②活動が「健康」に与えた影響、③活動に対する家族の理解、④活動と家庭のバランス、⑤地域への貢献、⑥今後の活動に向ける抱負(⑤と⑥は代表にのみ質問)、⑦アンケート調査(全員)⁽³⁾。

3-2 2つの市の活動体験から

一 留萌市「フードマガジン」に参加して

主宰者であるSさんは地元産の野菜を使って料理をつくることを基本としている。留萌は食材が豊富で、かんきつ類とレンコン以外のものはだいたい手に入るらしい。冬野菜の貯蔵にも挑戦している。その日(2010/1/30、参加費400円)は「三色マフィン」(材料：カ

ポチャ・ビーツ・ケール), 4種類のジャガイモで作る「四色フライドポテト」, 地元豆類がたっぷり入った「アメリカ風けんちん汁」であった。

親子フードマガジンというキャッチフレーズだったので, Sさんの子どもたち3名(一人は赤ちゃん)はもちろんのこと, 他の参加者も子どもたちを連れ, 一緒にジャガイモやニンジンなどを切ったりとそれは賑やかだった。Sさんによると, 当初はSさん宅で集まったが, 参加人数が増えるにつれ, 市の「健康の駅」を利用するようになったそうだ。

「健康の駅」には1階に厨房と健康サロンがあり, 2階に軽運動室がある。健康サロンでは参加者の夫数名も参加し, 子どもたちの世話をしたり一緒に遊んだりしていた。参加者の年齢構成は30代と40代が多く, 子どもも含めると50名を超えていた。Sさんはこの活動の中心に地元の生産者と消費者をつながたいという希望をもち実践している。それはまさに留萌市の「地産地消の推進」を実践する住民参加型の活動といえるだろう。

一 士別市「めん羊工芸館」に参加して一

「世界のめん羊館」内に, 市が2009年8月にオープンさせた体験観光施設「めん羊工芸館くるるん」がある。店内には糸車や織機がたくさん備えられ, 女性たちの紡いだ品々が魅力的に展示されている。約20の体験メニューが用意され, われわれもフェルトでつくる羊のストラップを体験した(2009/12/25, 参加費500円)。出来上がるまでの時間は作品によって異なるが, 約30分~2時間程度ということである。

IV. 分析結果

4-1 2つの市の女性リーダーたち

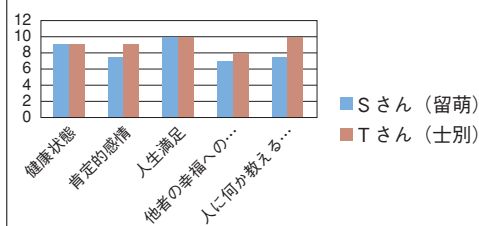
留萌市「フードマガジン」主宰者Sさんは, 子どもを出産してから安全・安心な食に興味をもった。やがて彼女の関心は食を通じて人

のネットワークづくり, 地元生産者と消費者をつなぐ活動へと発展する。SさんのパートナーはNPOを立ち上げ, その活動を物心両面で支え, 同時に地域資源の発掘と伝達を行っている。Sさんはいまや市のテーマの一つ, 「笑顔で元気な健康の街づくり」にぴったりの人材として認められ, 市が開催するワークショップ等に出演依頼されることが多い。

一方, 士別市「めん羊工芸館くるるん」の代表であるTさんは好奇心旺盛で, 身近な自然の材料から染め色を発見する。Tさんの貢献は主婦の趣味を商品化させ, 市の認知度を高めたことだろう。ここ数年, 三越や大丸デパート等で展示販売している。しかしTさんはすでに60代後半, 後継者がいないことが目下の悩みだ。市の理念の一つ, 「地域資源」~地の力~は, 市の資源を羊毛作品として宣伝し, 認知度を広げている意味でTさんの存在は大きいといえるだろう。

つぎに, アンケート調査の結果をみてみよう。図2に示すように, 2人の女性たちにはいくつかの共通点がある。

図2 女性リーダーのwell-beingと他者の幸福への貢献、教えること



まず第一に, かれら二人の「健康状態」は10点中9点と高い評点をつけている。しかし図には示していないが, 日々の健康状態をどの程度コントロールしているかといった質問では両者とも10点のうち5点と低い。その理由は, Sさんは3人の子どもをもつ超多忙ママであり, 一方, Tさんは真夜中に作品づくりをしなければならないほど日中は忙しいという。健康でなければできない活動だが, 自

分の健康をコントロールできるほど暇ではない、という状態なのだろう。

つぎに「肯定的感情」では、Tさんの10点中9点に対してSさんの方は7.5点と若干低くなる。Sさんは子育て真っ最中であり、ゆっくり自分の時間をもつことすらできない。一方、Tさんは子育ても終わり、自分の好きな作品づくりに専念できる。時間に関してTさんの方が断然有利だ。また「人生満足」についての項目では二人とも10点満点で非常に満足していることがわかった。

他者の幸福にどの程度貢献しているかを尋ねた質問では、二人の間に大きな差はない。しかし図には示していないが、その貢献することについてどの程度考えたり、努力しているかを尋ねた質問では、Sさんは10点中7点に対しTさんは10点満点と高い。この結果について、活動の期間が影響しているのではないかと考えられる。士別市のTさんが活動を始めたのは昭和55年、青年会議所との「サフォーク研究会」である。一方、Sさんは40歳、しかも留萌市の出身ではない。結婚をして留萌市に住み、子どもたちに体に良いものを食べさせたいという、きわめて個人的理由から活動をスタートさせている。

もう一つ、二人の間に差があったのは、「人に何かを教えるのが好き」かどうかを尋ねた項目である。Tさんは10点満点であるのに対し、Sさんの方は7.5点と低い。筆者が行った聞き取り調査でもSさんは人にうまく伝えるのが苦手、これは私の課題だ、と述べていた。

4-2 個別女性たちへの聞き取りから

では両市における他の女性たちの活動と健康および家族との関連はどうなのだろうか。留萌市で聞き取りとアンケート調査を行ったのは、親子フードマガジンでの食の体験後で、参加した女性たち4名と、以前はフードマガジンでメンバーで、今は自分たちで別のサー

クルをつくって活動している女性2名である。また士別市はアンケート調査を事前にやっておいてもらい、二日間は聞き取りだけに終始した。「めん羊工芸館くるるん」に来てTさんの指導を受けながら、自分たちの作品づくりをしている女性たちである。年齢層は留萌市よりも高く、40代は1名だけで、50代と60代が多かった⁴⁾。

留萌市：

SEさん(30代の専業主婦)：食への関心はSEさんの母親が癌になったこと、妹さんがアトピーだったことから安心安全な食づくりに興味をもつようになった。母親の無農薬・安全な食へのこだわりのかいがあって妹のアトピーはよくなった。また夫も食にとっても関心が高く、自ら納豆までつくってしまう。その日も親子フードマガジンに参加し子どもの世話をしながら、一緒に食事をした。Sさんとは公園デビューで知り合い、フードマガジンの会員としてもお付き合いをしている。

EDさん(30代、フルタイム)：留萌には市役所に勤めたことで住み着いた。夫婦ともに実家が農家ということもあり、無農薬や有機栽培には興味があった。しかし安心安全な食を意識し出したのは子どもが生まれてからである。お米は地元産の完全無農薬を食べている。子どもには「心穏やかに」育ててほしい。Sさんとは子育てでサークルで知り合った。

SGさん(50代、フルタイム)：2009年8月からフードマガジン事務局に勤めている。Sさんの活動を支えるのが仕事。たとえば、地元の農家取材し生産物を持ち帰り、新たな付加価値をつけて地元の消費者に紹介するなど。今は出身地である小平町の食材に魅力を感じている。子どもはすでに独立し夫と2人暮らし。夫は以前から体が弱く働くことには理解もあるし協力的。この仕事は楽しく発見の連続、チャンスを得たと思っている。

KUさん(50代、フルタイム)：フードマガジンの立ち上げメンバーであり、編集スタッ

フでもある。5年前にSさんと出会い、留萌の食材の豊かさと安全を他の人にも広めたい、と意気投合しフードマガジンを始めた。エフエムもえるにも関わり、Sさんと一緒に番組をもったこともある。家族の生活と健康に責任をもつ主婦という立場で柔軟に自身の活動を合わせてきた。しかし、今はこの仕事に全力投球できる時期だと思う。SGさんの持ち帰ったものを素にして料理をつくり、レシピを起こして写真を撮り、それをマガジンのホームページに載せる。今は子どもは独立し夫と2人。だれかに必要とされる今の仕事はKUさんの生きがいになっている。

士別市：

Kさん(50代, 専業主婦)：30年間保育園のフルタイムとして働いた。しかし、病気になり専業主婦になって自分の時間を大切にしたいと思うようになった。Tさんの活動には以前から興味関心があり、家も近いのでつきあいは長い。フェルトの作品は趣味の範囲を超え、商品として売れている。しかし、Tさんのようにボランティア精神で地域活性化のために尽くすつもりはない。子どもはすでに独立し、夫と二人暮らし。

Iさん(50代, 専業主婦)：工芸館に来始めて4か月。Kさんに誘われて始めた。習字は15年続けている。娘が3人いて独立した。習字とは違い、工芸館は他の仲間とおしゃべりできるのでとても楽しい。痛になって何度か再発したけれど、ここにくると癒されていると思う。

SIさん(40代, 自営業)：工芸館に来て5, 6年になる。夫と夫の両親と同居なので、週末の唯一の息抜き場になっている。10代, 20代はブランドを身につけおしゃべりするのに夢中だった。周りもみんなそうだった。でも同じ年代の友人は子どもの教育費がかかる時期なので経済的に苦しく働いていて不満も多い。一人息子は大学生だけど、自分たち世代と違うのは、“自分で決められない”と

ころだと思う(注：Iさんは手の関節が曲がり、私たちに明かさなかつたがリウマチの可能性が高いと思われる)。

Oさん(50代, フルタイム)：保健師として地域包括センターで働いている。子どもは4人いて、そのうちの息子の一人は現在フリーターだ。工芸館に来て5年になる。週末にしか来れないが仕事からも家庭からも離れて、“自分だけの世界”を実感する。作品づくりもおしゃべりもとても楽しい。

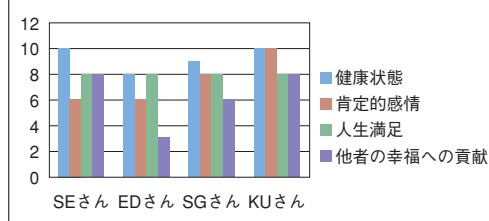
4-3 個別女性たちのアンケート結果

留萌市：

図3に示すように、4名に共通していえることは、「人生満足」の項目が10点中8点と全員同じ高い評点をつけていることである。SEさんとEDさんは30代, SGさんとKUさんは50代と年代が異なるにもかかわらず、「人生満足」には大きな違いがない。Ryffら(2003)の幸福感研究によると、感情には人生の浮き沈みによる高低があるのに対し、「人生満足」はどの調査時点でも一定しているという知見が得られている。

つぎに特徴的なのは、「肯定的感情」の項目に関するものである。30代のSEさんとEDさんに比べて、50代のSGさんとKUさんは高い評点をつけている。先に述べたように、かれらは子育てを終え、家庭内労働にあまり縛られず、エフエムもえるにフルタイムとして働き、またその仕事に生きがいを感じている。EDさんも公務員としてフルタイムの仕事に就いているが、彼女は二人の子育てと家

図3 女性たちのwell-beingと他者の幸福への貢献(留萌市)



事、そして仕事の挟間にたたされている世代だ。筆者の先行研究（平賀，2007）においても、35歳から43歳の妻の「肯定的感情」は55歳から64歳の妻のそれに比べてかなり低く、この年代は夫もまた「肯定的感情」が低いという結果となっている。

「他者の幸福への貢献」の項目に注目してみると、EDさんは他の3人のなかでもっとも評点が低い。子どもには「心穏やかに」育てほしいと述べているが、時間的余裕がないのが悩みである。評点の高いSEさんは専業主婦で「健康」に関する関心が高く、夫もフードマガジンに参加するなど妻とのあいだで関心を共有している。

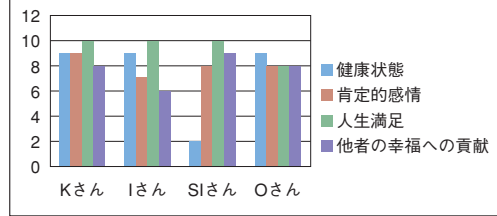
50代のKUさんもまたSGさんよりも評点が高い。SGさんの場合、夫が病弱なので仕事への理解はある半面、仕事に就くことを期待される立場にある。しかし、KUさんは家族のことよりも自分の仕事に全力投球できる立場になった。SEさんとKUさんの評点の高さは、専業主婦という時間的余裕、あるいはフルタイムになっても「他者の幸福への貢献」に寄与できるという心理的・精神的余裕の結果といえるのかもしれない。EDさんとSGさんは他の二人に比べて「健康状態」もわずかだが低い。また図には示していないが、健康状態のコントロール項目では前者二人が10点なのに対し5点と低く、幸福の貢献について考えたり努力する項目も前者二人の8点に対し6点と4点と低い評点をつけていた（図3）。

士別市：

図4をみると、士別市の女性たちも留萌市同様、「人生満足」の項目に高い評点をつけている。この結果は、Ryffら（2003）の先行研究を裏づけていると思われる。つまり、どのような状態に人は置かれても、人生への満足に対する認識は変わらず一定しているということだ。

では「肯定的感情」ではどうだろうか。K

図4 女性たちのwell-beingと他者の幸福への貢献（士別市）



さんは10点中9点ともっとも高く、SIさんとOさんが8点、Iさんが少し低く7点である。Iさんは「めん羊工芸館くるるん」に来てまだ4カ月しかたっていないが、他の三人はすでに5年以上と経験も多く、作品の工程を来館者に教える技術をもつと同時に自らの作品を販売できるスキルも持ち合わせている。工芸館に来ること、おしゃべりをする、新しい色合いの染めに挑戦し作品にすること、これらすべてが“自分だけの世界”（Oさんの言葉）を実感することであり「肯定的感情」を高める効果を与えているのかもしれない。

つぎに、SIさんの「他者の幸福への貢献」と「健康状態」に注目してみた。というのも、この2つの項目の評点には大きな開きがあるからである。「他者の幸福への貢献」には9点、「健康状態」には2点をつけている。先でも述べたが、SIさんは夫と夫の両親との同居で印刷の家族経営を営んでいる。SIさんにとって家庭内労働は他の三人の核家族世帯よりもなにかと骨の折れる苦労が多いのではないか。工芸館に来るのは唯一の息抜き、と言っていたからである。では「健康状態」の低さはなぜだろうか。これは筆者らの観察したりウマチか何かの病だとしたら、納得のできる数値である。図には示していないが、健康状態のコントロール項目が10点満点、幸福の貢献について考えたり努力する項目は8点とどちらも高い評点をつけている。このことから、SIさんは健康状態は悪いが健康であるための努力と、他者の幸福のために日々努めていることが推察された。

50代の K さんの場合ではどうだろうか。「他者の幸福への貢献」の項目は10点中7点だが、幸福の貢献について考えたり努力する項目では10点満点をつけている。先に述べた通り、K さんは30年間フルタイムとして働き、病気になって専業主婦となった。K さんは工芸館の代表である T さんから後継者として期待されるほど人に教える能力や作品技術を高く評価されている。しかし、T さんのように時間も労力もすべてを工芸館にかけることは考えていないようだ。「健康状態」の項目は9点と高いが、健康のコントロール項目では5点と低い評点をつけている。

K さんに紹介されて工芸館に来たという I さんは、癌になり何度も手術を繰り返してきたという。また「健康状態」の項目では K さん同様9点、健康のコントロール項目も9点と高い評点をつけていた。しかし、「他者の幸福への貢献」の項目では6点、幸福の貢献について考えたり努力する項目でも5点とけっして高くはない。K さん、I さん、SI さんはそれぞれ工芸館に来て作品をつくること、おしゃべりをすることで病を忘れ元気を得ているように見受けられた。人と人をつなぐ場を提供しているという意味で工芸館の果たす役割は大きいと言えるだろう (図4)。

V. 結論と今後の課題

女性たちは健康というものをどのように捉えているのだろうか。調査地として選んだ2つの地域でみてきたことは、健康を「身体」と「心」、そして「他者とのつながり」に結びつけて考えられていたことである。留萌市のフードマガジンの会員であり編集者でもある KU さんは、「誰かのお世話ができていくこと、そういう満足感が精神も心も体も健康にしてくれる。誰からも求められないことは辛い。誰かに繋がっていることが健康を保つことだと思う」と述べている。

士別市においても何人かの女性たちは自ら深刻な病気であるにもかかわらず、作品をつくること、他者とつながっていることで自身を「健康」と評価していた。これらの女性たちの活動は、留萌市のフードマガジンの主宰者である S さん、士別市の工芸館の代表 T さんの活動に意義を与え、脇から支えていることは間違いない。

まとめると以下の点が明らかになってきた。

1. 地方都市の健康・福祉 (well-being) は地元の産業に活路を見出そうとしている。留萌市は食と人をつなぎ、士別市は羊と人をつなぐ。
2. 両市が掲げる地域のげんき (活性化) には女性が活用されている。留萌市では S さん、士別市では T さんが「民」の代表的顔である。
3. 他の女性たちの活動は、私的領域の健康と家族の枠を超え、他者とのつながりのなかで健康と地域のげんき (活性化) に一役買っている。

このことから、「地域のげんき (活性化) と女性の活用は互いに作用しあい、地域の健康・福祉 (well-being) にプラスの影響を与える。」という仮説は一定程度支持されたのではないかと思われる。それは大都市にはない、ローカルな地方都市だからこそ、みえやすいかかわりの効果といえるのではないか。たとえば、士別市の T さんの活動は当初行政とはかかわりがなかった。しかし、一村一品運動のなかでマスコミに注目され、それが結果として自分たちの活動拠点の確保、女性たちと地域をつなぐ接点へと発展していった。留萌市の S さんの場合は、子育てという私的領域における食の安全から出発し、自宅を開放して地域の人たちと食づくり、やがて地元食の資源をみんなに伝えたいとパートナーと一緒に NPO を立ち上げ、健康の駅で活動を続けている。行政とは一定の距離をとっているという印象を受けた。両市のリーダー的の女

性には、行政とのパートナーシップ的關係はあり得ても、上下関係にはなり得ない、なりたくないという思いが伝わってきた。

しかし、課題もみえてきた。Iの問題の所在のところでも述べたが、両市はともに若者の流出、少子高齢化、財源の問題を抱えている。にもかかわらず、その解決にあたって、笹森（2005）が指摘する、相対的に遅れていた「生活の場」の開発よりも従来の「生産の場」の開発の方に力点を置き、住民自身が何を欲しているかを見極め、その欲求を生活環境の場に投影させていくという視点が活かされていないのではないのか。

そこで、このように考えてみてはどうだろうか。地域のげんき（活性化）に女性にもっと活躍してもらおうのだ。女性たちはもともと家庭や地域のなかで金銭に還元されない生活者であった。したがって、女性への活用の仕方は、新たに経済的利潤を生みだすものを発見するというよりは、地元にもとものあったモノやコトを再発見し、過去にさかのぼって知恵を学び、今いる人々につないでいく（川勝・鶴見，2008）という内発的発展の視点である。留萌市のKUさん、士別市のKさん、彼女たちはリーダー的役割を担っているわけではないが、地域の魅力ある資源の発見者であり、また伝達者でもある。彼女たちのような人をもっとたくさん見出し、活用していくことで地域のげんき（活性化）、ひいてはローカルな地方の健康・福祉（well-being）に繋がっていくのではないかと思われる。

【付記】

本稿は「2009年度北星学園大学特別研究費による研究（共同の特別研究活動）」の補助を受けました。

【注】

- (1) 留萌市と士別市の「健康」に関する概略と把握については、インターネット検索、行政による健康づくり政策、職域団体等への聞き取り調査によって情報収集を行った。
- (2) 聞き取り調査とアンケート調査の双方に回答を得た場合に、謝礼として3000円の図書券をさしあげた。
- (3) アンケートの質問紙では10点を最高得点とし点数が高いほど評価が高いとした。
 - ・健康状態：「最近のあなたの健康状態はどの程度か判断してください」「とても悪い」1点～「とても良い」10点の10段階評価。
 - ・健康管理：「最近のあなたはどの程度あなた自身の健康状態をコントロールしていますか。」「とても悪い」1点～「とても良い」10点の10段階評価。
 - ・Ryffの肯定的感情：「楽しい、機嫌がいい、とても幸せ、穏やか・安らか、満足、満たされている」の6項目（すべて逆転項目）。5段階評価×2とし10点満点とした。
 - ・Ryffの「人生への満足」「とても悪い」1点～「とても良い」10点の10段階評価。
質問内容：「最近のあなたの人生は全般的にどのくらいか判断してください」。
 - ・他者の幸福への貢献（「貢献していない」1点～「とても貢献している」10点の10段階評価。
質問内容：「あなたの仕事・家族・友人・地域社会に対する時間面・金銭面・心づかいなどに関する貢献について判断してください」。
 - ・他者の幸福に貢献することについて考えたり努力する（「全くない」1点～「非常によくある」10点の10段階評価。
- (4) 留萌市と士別市の個別女性たちの聞き取りとアンケートは両市のリーダー2名の他に、留萌市は4名、士別市も4名である。留萌市はフードマガジンの活動から離れた2名、士別市は活動1カ月の1名は趣旨からずれていたため分析から除いた。

【参考文献・参考図書】

- 川勝平太・鶴見和子『「内発的発展」とは何か—新しい学問に向けて—』，2008，藤原書店。
今野 亨・窪田映子，2008，“人口減少する地方

都市の地域連携による活性化の取り組み～地域活性化をテーマとした広域エリア・マネジメント (北海道留萌地域)”

Architectural Institute of Japan.

笹森秀雄, 2005, 『リージョナリズムと地域社会学』, 梓出版社.

中道仁美編著, 2008, 『女性からみる日本の漁業と漁村』, 農林統計出版.

平賀明子, 2007, 「中年期カップルにおける肯定的感情と否定的感情—アメリカにおける中年期研究 (MIDUS) の日本版データにみる—」
『現代社会学研究』VOL. 20, 94-113.

Ryff, C. D., & R. C. Kessler, 2003, *HOW Healthy ARE WE?* The University of Chicago Press.

[Abstract]

Well-Being and Family in Rural/Fishery Regions in Hokkaido : A Case Study of Women's Activities in Rumoi and Shibetsu Cities

Akiko HIRAGA
Katsunori SUZUKI
Makiko HABASAKI

This paper looks at well-being and family, focusing on women's activities in the small cities of Rumoi and Shibetsu in Hokkaido. Both cities face the problems of an aging and decreasing population. Therefore, local citizens are trying to locate regional resources related to well-being and use them to stimulate their region. The authors carried out a questionnaire, person interviews, and observations of the participants, who were ten women ranging in age from their thirties to sixties, including two local group leaders. The following results were observed. (1) Well-being/health in small cities is related to local industries. Well-being/health was tied to food in Rumoi, and was tied to sheep and wool products in Shibetsu. (2) Both cities have representative women who lead local revitalization, Ms. S in Rumoi and Ms. T in Shibetsu. (3) Other women in the local groups maintain contact with various groups and promote local revitalization and regional health. The next phase of this study to reveal the well-being/health in rural-fishery areas will focus on men's activities for stimulating revitalization.

Key words : Rural-Fishery Regions, Women, Well-Being and Family

